



日本列島にオオカミを復活させ 自然の生態系を取り戻す運動が

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

日本列島からオオカミの姿が見られなくなったのは、明治の末期(1905年)のことだと言われています。狂犬病を伝染する、人や家畜を襲うといった理由で害獣として駆除され、絶滅してしまつたとされています。その結果、100年以上たった今の日本列島ではどんなことが起きているのでしょうか。

自然界の生物たちや土、水、空気などのつながりを生態系と呼びます。地球上ですべての生きものがつながつて共生している関係です。時として、オオカミがシカを襲って食べるように敵対関係に見えることがあります。生態系が健全に保たれるためには、このような「弱肉強食」の関係も必要です。

トキやコウノトリと同様に、絶滅してしまつたオオカミを日本列島に導入し、オオカミを頂点捕食者とする生態系を取り戻そうと運動している人たちがいます。一般社団法人「日本オオカミ協会」(東京都港区赤坂1・4・14、ダイヤモンドビル赤坂5F、電話0558・64・8800)は「森・オオカミ・ヒトの良好な関係を考える」をテーマに1993年に設立された団体です。

会長を務めるのは東京農工大名誉教授の丸山直樹博士です。シカなどの大型哺乳類の生態研究が専門ですが、ヨーロッパや米国でのオオカミ保護活動を見て、1989年から日本でもオオカミを復活すべきだと呼び掛けていますが、「当時は

バカ扱いされました」という。明治以来の、オオカミが人を襲うという「赤頭巾ちゃん症候群」は日本でも根強く、なかなか耳を貸してもらえなかったそうです。

シカとイノシシ増え続けて

さて、丸山博士が「オオカミの復活」を呼び掛ける理由は何なのでしょう。日本列島で起きている生態系の破壊、森の崩壊、農業被害の拡大を防ぐのが目的です。オオカミという天敵のいなくなった日本列島では、北から南までシカとイノシシの数が増え続け、自然のバランスを崩すほどになっています。

北海道では2000年に16万頭と推定されていたエゾシカが2010年には64万頭に増加したと言われます。牧草の若芽がシカに食べつくされる被害は日常的に起きています。環境省の調査によれば、自然植生に影響のないシカの密度は、1平方kmあたり3〜5頭とされているのに、シカの食害が深刻な吉野熊野国立公園の大台ヶ原(奈良、三重の県境)では、約30頭と推定され



米国・イエローストーン国立公園のクマ・オオカミセンターで飼育されているハイイロオオカミ (丸山直樹博士提供)

ています。うつそうとした原生林だった大台ヶ原の荒廃は、ドライブウエーの開通や台風の影響なども指摘されていますが、シカによる樹木の皮や笹の食害も大きな原因とされています。

オオカミを導入して生態系のバランスを保っている成功例は、米国の国立公園・イエローストーンです。丸山博士によれば、1995、96年に31頭のカナダ産のオオカミが導入されると、植物を食べる大型のシカ・エルクなどが、オオカミに捕食されることにより年々減り始めたそうです。2009年には、オオカミは同公園とその周辺で200頭近くになり、1994年に1万6000頭いたエルクは2010年に4000頭台になりました。その結果、様々な樹木の林やヤナギの群落が復活し、ビーバーなどの小動物も戻ってきたそうです。

丸山博士は「イエローストーンでオオカミが人を襲つたことなどありません。日本でもオオカミの復活に賛成する人が反対の人より多くなりました。ユーラシア大陸にいるタイリクオオカミはニホンオオカミの親戚ですから、日本に導入すると生態系の再生に貢献してくれます」と熱く語っています。

財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。